

第173回国際研修に参加して ～置き土産を添えて～

横浜保護観察所 堀内亜希

1 はじまりは雷雨

研修開始日の前日。国連アジア極東犯罪防止研修所（以下「UNAFEI」という。）の最寄り駅である東中神駅で、同じ国内研修員のじゅんさんに遭遇した。挨拶もそこそこに私たちは駅から研修所を目指して歩き始めたが、建物は見えているのになかなかどり着かない（後に私たちが歩いていた経路は最短ルートではなかったことを知った。）。その上、道中突然の雷雨に見舞われ、2人で「この研修の前途多難さを表しているのでは・・・」と戦々恐々とした。

激しい雷雨から始まった第173回国際研修は、私の法務省職員人生において最も刺激的な5週間となった。

本稿では、国際研修において私の印象に残った経験と感想、そして私たち研修員がUNAFEIに残した「置き土産」について記したい。研修での刺激的で素晴らしい日々やかけがえのない仲間たちについては筆舌に尽くしがたいものがあるが、この研修の大いなる魅力を少しでもお伝えできればと思う。

2 研修について

(1) IP発表

研修員は全員、研修の第1～2週目に、研修の主要課題に沿った個人発表を行う。第173回研修の主要課題は「女性・子どもに対する暴力事犯者の再犯防止に向けた処遇」とされ、研修員からは自国の犯罪の状況、捜査、裁判、施設内処遇、処遇プログラム、多機関連携、被害者保護など多種多様な発表がなされた。一口に「女性に対する暴力」「子どもに対する暴力」と言っても、各国の文化的背景や宗教、思想によって状況が全く異なっていた。日本国内ではおよそ考えられないような事件についての発表もあった。この発表により、再犯防止のために最適な処遇が何かということを考えることの難しさを改めて実感した。一方で、全ての研修員が自国の犯罪状況や暴力事犯者に対する処遇をより良くするために必要な情報を得ようと、積極的な質疑応答や意見交換がなされていた。休憩時間や食事の時間にも、各自の発表についての質問や意見交換は続いた。

(2) 講義

研修の中盤では、国内外の専門家による講義を聴講する機会が設けられていた。滅多に講義を受ける機会のないような著名な国内講師陣の他、国外からも3名の講師が来日され、より国際的な視点から、女性に対する暴力事犯者についての現状、統計や実証研究に基づく再犯防止対策など、熱い講義を受けることができた。また、国外からの講師の方々とは講義外でも、我々研修員とともに食事をしたり余暇を過ごしたりしながら、犯罪者の処遇やプログラム、実証研究から、国や施策の在り方まで、様々な話題で議論を交わすことが

できた。

(3) 見学, 視察

講義の合間には、多くの関係機関への見学や、広島、京都、大阪への研修旅行にも行かせていただいた。視察先は、刑務所や少年鑑別所、更生保護施設等だったので、ある程度知識はあると自負していたが、制度的背景の全く異なる海外研修員からの予想外の質問をされることが多く、答えに詰まることがあった。

例えば、刑務所を視察した際には、日本の死刑制度について聞かれ、それをきっかけに様々な国の死刑や終身刑について意見交換をした。また、少年鑑別所では、そもそも鑑別所に収容されている少年たちがどういった立場にあるのかを説明するのに苦慮した。さらに、少年たちの人権はどのように尊重されているのかとの質問をされ、しばらくその場で考え込んでしまい、結果、海外研修員に「そんなに考え込ませるつもりはなかった」となぐさめられる事態となった。この質問についてはいまだにうまく答えられる自信がない。

施設や制度について、その背景にある関連する法律や思想、意義などをきちんと理解して説明できなければ、制度のことを全く知らない人に説明することは困難なのだ実感させられた。

(4) グループワーク

研修の中でも最も有意義かつ最も大変だったのが、グループワークであった。グループワークのミッションは、7人ほどのグループでテーマに沿ったディスカッションを行い、報告書を作成し、最終日にプレゼンテーションを行う、というもの。ディスカッションのための情報収集をし、それまでに受けた講義やIP発表の中に有益な情報がなかったか洗い直し、収集した情報に基づいてディスカッションをして報告のまとめ方の方向性を定めていった。が、この方向性自体が定まらず、ディスカッションは時間外まで続くことがしばしばあった。研修員は、検事だったり、警察官だったり、保護観察官だったり、立場が異なる。国によって制度設計自体も異なる。互いの意見の根拠や前提が食い違ったまま議論が進まず、ぶつかることもあった。それでもなんとか報告書をまとめ、プレゼンテーション資料の作成までこぎつけたにも関わらず、発表の前日の夕食後に一部研修員間でプレゼンテーションの方法について議論が紛糾したときには、正直なところ頭を抱えた。最終的に、発表当日の午前中に議論がまとまり、無事に全体発表を乗り切ったときには何もいえない達成感があった。

大変だった反面、グループワークにおいて行ったディスカッションでは、様々な情報を得ることができ、さらにそれらを整理することができた。私が属していたグループは、「女性・子どもに対する暴力事犯者の処遇と再犯防止のための多機関連携」をテーマとしていたが、国によって事犯者が有する問題性が異なったり、制度設計や司法手続が異なっているにも関わらず、抱える課題や必要とする連携には重なる部分が多くあった。

作成した報告書やプレゼンテーション資料は、本当に素晴らしいものになったと自負している。

3 メインイベントは余暇にあり

率直に言って、この研修における日本人研修員のだいたいの味は「余暇」にあった。平日の定時後や週末には、東京近郊での観光や、買い物などのイベントを日本人研修員が中心となって企画して、海外研修員をアテンドした。日本人研修員は、海外研修員の興味関心は何か、出来るだけ低予算で体験できる日本文化がないか、人気のお土産は何か、といったことを常にリサーチしては、イベントを企画していた。

浅草、東京スカイツリー、秋葉原、渋谷、といった代表的な都内観光地を案内したり、高円寺で人混みにもまれながら阿波踊りを見たり、河川敷で花火大会を楽しんだりした。平日の夜には、スーパー銭湯に行ったりもした。また、一部の海外研修員の要望に応じて、鎌倉に行ったり、高尾山に登った日本人研修員もいた。外出には迷子と行方不明と不満はつきものだった。乗り慣れない電車では、降りるはずの駅で降りられずに行方不明になった者がいた。それ以降海外研修員たちは「降りる駅は後何駅で着くのか」と何度も確認するようになった。観光地ではいつももっとゆっくり見たい派と買い物をしたい派に分かれた。「もう歩けない」人と「もっと色々スピーディーに見たい」人がいて、全員一緒に観光をすることは不可能に近かった。買い物にも随分振り回された。一部東南アジアで人気を誇る育毛剤「加美乃素」や、期間限定の「竹炭チーズケーキチロルチョコ」など、海外研修員の欲するものは私たちの予想の範ちゅうを超えてきた。

日本人研修員にとって最大のイベントとなったのは、「河口湖で富士山を見るツアー」であったと思う。海外研修員は全員ではなかったが、十数名で高速バスを使って河口湖に行った。その日は朝からあいにくの雨で、河口湖まで行っても富士山は見えるかどうか分からなかった。その日の最後に遊覧船に乗った直後、雲が晴れて富士山が姿を現した時には、海外研修員を含む船上は歓喜に包まれた。富士山の写真や動画を撮る海外研修員たちを見て、心から安堵し、企画をしてよかったと思った。

全てのイベントが思い出深いし、何より、日本人として、日本の魅力を再確認する良い機会にもなった。困ったことや慌てたこともたくさんあったが、それ以上に本当に楽しかった。



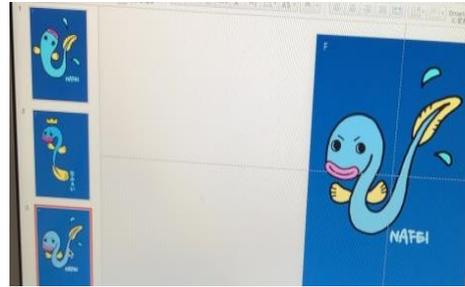
4 「置き土産」

私たちは、他の期にはないであろう「置き土産」をUNAFE Iに残した。

研修2週目、事務次官招宴の懇親会の帰りのバスの中で、日本人研修員のやよいさんから、「研修員のオリジナルTシャツ作りたくない？」と提案された。私はもろ手を挙げて賛同した。その際たまたま近くの座席に座っていた古橋教官の「オリジナルTシャツを作ったというのは聞いたことがない」という言葉も、私たちのアイデアを後押ししてくれた。海外研修員たちにもこのアイデアを話すと、「ぜひ作ろう」と言ってくれた。こうして、やよいさんを中心に「オリジナルTシャツ」企画は進められた。

突然だが、法務省保護局に「更生ペンギンのホゴちゃん」というキャラクターがいるのをご存知だろうか。現行のホゴちゃんは、保護局で庶務係員をしていた頃の私がデザインをしたものである。そして、私はこのことを自ら公言しており、早い段階で研修員に「研修中たまに見かけるペンギンのキャラクターの生みの親」として認識されていた。そのため、研修員たちに「研修のオリジナルキャラクターを作ってよ！」とよく言われていた。この研修員たちの依頼にTシャツ企画で応える形となり、私がTシャツデザインを担当することとなった。

Tシャツ企画が持ち上がった週の週末、キャラクター案を数案作成した。キャラクターは、UNAFE Iを日本語読みした「うなふえい」から連想し、うなぎをモチーフとしたキャラクターとした。週明け、作成した複数の案を見てもらい、何人かの研修員から意見をもらい、「うなふえい君」は完成した。同時に、Tシャツのバックプリントのデザインも作成した。実は、デザイン以上に大変だったのは、研修の合間をぬってのTシャツ製作者とのやりとりだった。データ形式や納品期日の関係で、業者を変更するトラブルにも見舞われたが、



Tシャツは研修最終週にはなんとか完成した。



私たちは研修最終週に、Thank Youパーティーと称して、UNAFEIの教官や職員を招いたパーティーを企画していた。そのパーティーにおいてTシャツはお披露目された。パーティーでは、研修員全員が私たちが作ったオリジナルTシャツを着てくれた。様々な国の個性的な研修員たちが、おそろいのTシャツを着ている光景は、微笑ましく、一体感もあり、作ってよかったと心から思った。

「うなふえい君」は研修員からUNAFEIに記念品として贈呈したトロフィーにも採用された。研修最終日のパーティーで披露された、研修中に撮られた写真のスライドショーでも使っていた。

研修同期のオリジナルキャラクターとして誕生した「うなふえい君」であったが、最終的には、UNAFEIに提供することになった。当然、私の著作権は放棄している。UNAFEIの広報のどこかで使われていたら、私はもちろん、他の研修員たちも喜んでくれると思う。

5 おわりに

行く先が思いやられるような雷雨の中で、「これから5週間をどう乗り切ろうか」と考えていたが、終わってしまえばあっという間だった。正直なところ、「国際研修に参加しないか」とお声がけいただいてから研修の初日に至るまでは、知らない海外研修員との共同生活、しかも大して得意でもない英語を使わなければならないという想像を絶する事態に、毎日不安と戦いながら個人発表原稿を作成していた。しかし、今思えば、そのような不安は全くのきゆうだった。研修の内容は充実、研修所は快適。全てにおいて恵まれた研修だったと思う。

何より、素晴らしい研修員たちに出会うことができた。第173回国際研修の研修員は、

全体的に落ち着いてはいたものの、それぞれがどこか熱い思いや闘志のようなものを持っていたように思う。そして、それぞれに異なるバックグラウンドのもとで、全ての研修員が、自国の司法制度や犯罪者に対する処遇制度をより良いものにしたいと、前向きに研修に参加していた。よって、「メインイベントは余暇」とは言っても、ただ遊んでいたわけではなく、余暇の移動中や食事中など、時間があれば私たちは犯罪者の処遇や再犯防止、それに関わる人々について意見を交わし続けた。

今でも私たちは SNS でつながっており、自国での仕事についての報告、家族のこと、UNAFEI での思い出話など、頻繁にやり取りがなされている。そのやり取りを通じて、自分も頑張らなければと鼓舞されている。

国際研修に参加させていただけたのは、本当に幸運だったと思う。

最後に、国際研修の全ての関係者に感謝申し上げます。ありがとうございました。